

【 復活のトロパリ 第2調 】

し せ ぎ る い の ち よ 、 な ん ぢ し に く だ り し
 死 生 命 爾 死 降

と お き 、 か み の せ い の ひ か り に て ぢ ご
 時 神 性 光 地 獄

く を こ ろ せ え り 。 し せ し も の を ち か よ
 殺 死 者 地 下

り ふ く か つ せ し め し と お き 、 て ん ぐ ん み な
 復 活 時 天 軍 皆

よ び て い え え り 、 い の ち を た も う し ゆ
 呼 日 生 命 賜 主

ハ リ ス ト ス わ が か み よ 、 こ う え い は な ん ぢ に
 吾 神 光 榮 爾

き い す 。
 歸

【 顯榮祭のトロパリ 第7調 】

ハ リ ス ト ス か み よ 、 な ん ぢ は や ま に お い て へ え ん
 爾 山 於 變

よ う し て 、 な ん ぢ の も ん と に そ の ち か ら に か
 容 爾 門 徒 其 力 稱

な い て な ん ぢ の こ う え い を あ ら わ し た ま
 爾 光 榮 顯 給

え り 。 ね が わ く は し ょ う し ん ぢ よ の き と う に よ
 願 生 神 女 祈 禱 因

りて、われらつみなるものにもなんちのえ
我等罪者爾永
いざいのひかりはかがやかん。ひかりをほど
在光輝光施
こすしゅよ、こうえいはなんちにきす。
主光榮爾歸

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使徒等同座者忠
じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實神智役者聖
なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
神撰笛愛
にみちたるうつわ、わがくにのこう
満器我國光
しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
照お者亜使徒主教聖
よ、なんちのぼくぐんのため、および
爾羊群爲及
ぜんせかいのために、いのちをたもうせい
全世界爲生命賜聖
さんしゃにいのりたまえ。
三者祈給

【 復活のコンダク 第2調 】

ぜん の う の き ゆ う せ い し ゆ よ 、 なん ぢ は か よ り ふ
 全 能 救 世 主 爾 墓 復
 く か つ せ し に 、 ぢ ご く は き せ き を み て
 活 地 獄 奇 蹟 を 見
 お の の き 、 し し ゃ は お 起 お き 、 ぞ う ぶ
 慄 死 者 起 お き 造 物
 つ は み て なん ぢ と と も に よ ろ こ び 、 ア ダ ム は
 見 爾 偕 喜
 と も に た の し い み 、 わ が き ゆ う せ い し ゆ
 共 樂 我 救 世 主
 よ 、 せ か い は つ ね に なん ぢ を ほ め う と お
 世 界 常 爾 讃 歌
 お う。

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ お と せ い し ん に き
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸
 す 、
 せ い せ い し ゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が
 成 聖 者 亞 使 徒 聖 我

くになんちをたびびとおよびいほうじんとうけ
 國爾旅人及異邦人受

しに、なんちははじめわがくににおいておの
 爾初我國於己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
 外來者知

ひかりとあたたかきをながし、なんちのて敵
 光暖流爾敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか神
 屬神子爲彼等神

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて建
 恩寵與教會

たり、いまこのきょうかいのためにいのり祈
 今此教會爲

たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給蓋我等其諸子爾

ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼我善牧者慶

べよ。

【 顯榮祭のコンダク 第7調 】

いまもおいつうもよよにい、アミン
 今何時世世

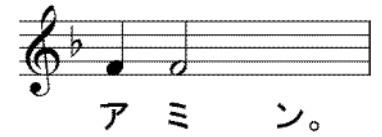
ハリスト オスカ みよ、なんぢが やまに おいて へんよ
 神 爾 山 於 變容
 うせし と き、なんぢの もんとは いるるに かな
 時 爾 門徒 容 稱
 いて なんぢの こう えい を み いた り、これ なん
 爾 光 榮 見 此 爾
 ぢの じゅう じか に て い せ ら る る を み て、く
 十 字 架 釘 見 苦
 る しみの じゆう なる を さ と り、なんぢが じ
 自由 悟 爾 實
 つに ちちの こう えい なる を せ かい に つ た え ん
 父 光 榮 世 界 傳
 た め な り。
 爲

司祭) (黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより 聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより 讚榮せられ、 悉くの天軍より 伏拜せられ、 萬物を無より有と
 なし、 人を爾の像と 肖とに依りて造り、 爾が 諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と 明悟とを興え、 罪を行 いう者を棄てずして、 其救の爲に 痛悔
 を立て、 我等卑しくして 不當なる 爾の諸僕を、 此の時に於ても、 爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾に當然の伏拜讚榮を 奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、 爾親ら我等罪人の口よりも 聖三の歌を受け、 爾の仁慈を
 以て我等に臨み、 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、 我が 靈と體と
 を聖にし、 我等に生涯善功を以て 爾に務むるを得せしめ 給え、 聖なる

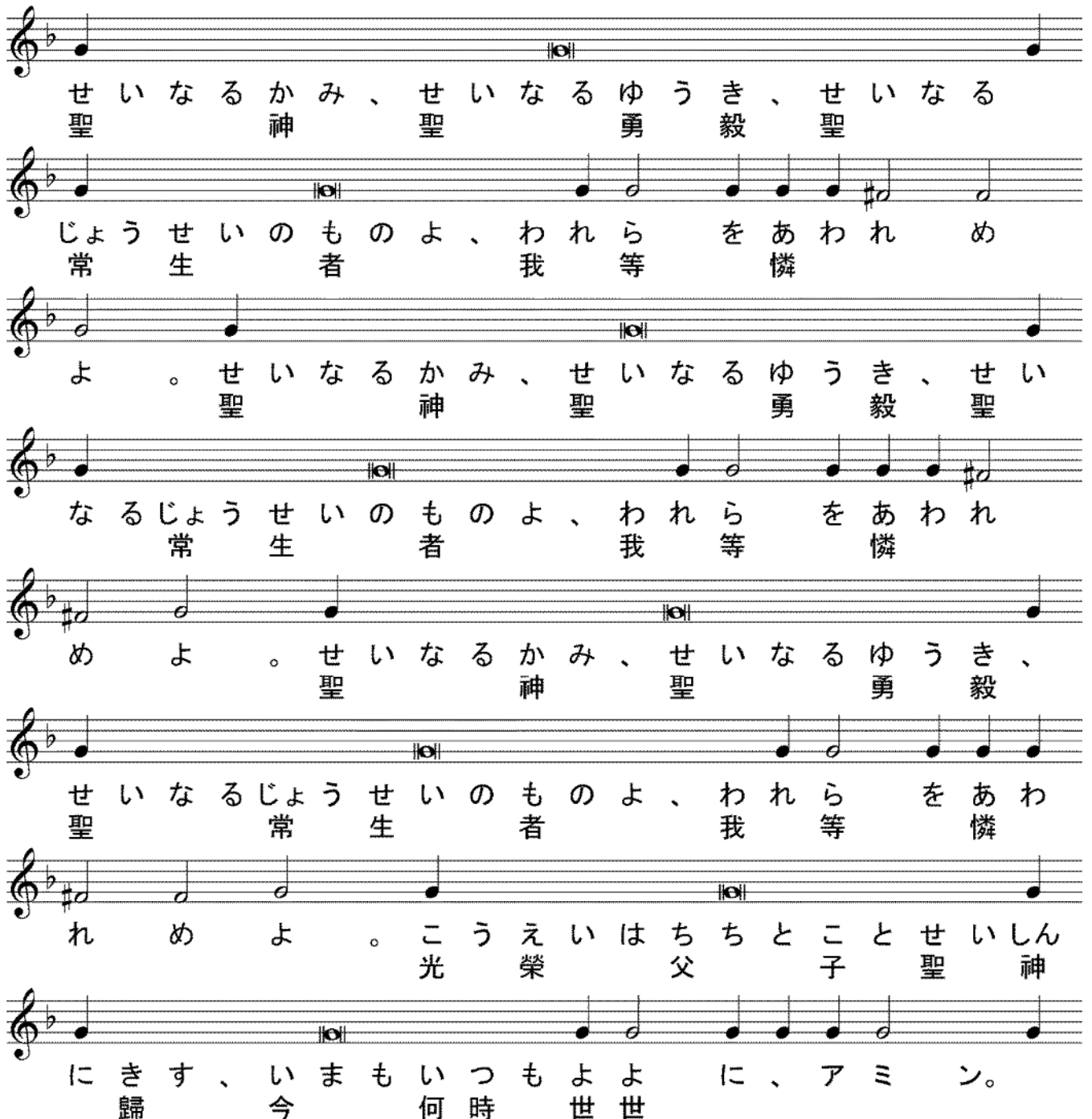
しょうしんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
生 神 女と古世より 爾 の 喜 を爲しし 諸 聖 人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋 我が神よ、 爾 は聖なり、我等光榮を 爾 父と子と聖 神に 献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】



せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖
じょうせいのものよ、われらをあわれめ
常 生 者 我 等 憐
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖
なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
常 生 者 我 等 憐
めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 神 聖 勇 毅
せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖 常 生 者 我 等 憐
れめよ。こうえいはちちとこせいしん
光 榮 父 子 聖 神
にきす、いまもいつもよよに、アミン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：^{しゅ な よ き もの あが ほ}主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、^{ざ もの なんぢ そのくに}ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
^{こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ}の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 プロキメン 主日第2調 】

司祭) ^{つつし き しゅうじん へいあん}慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) ^{なんぢ しん}爾の神にも、

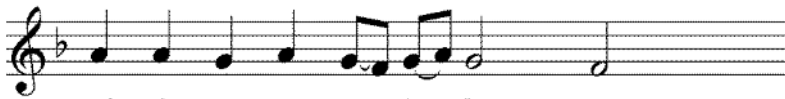
司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) プロキメン、^{しゅ わ ちから わ うた かれ わ すくい}主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
 主 我 力 我 歌 彼 我
 が す く い と な れ り 。
 救

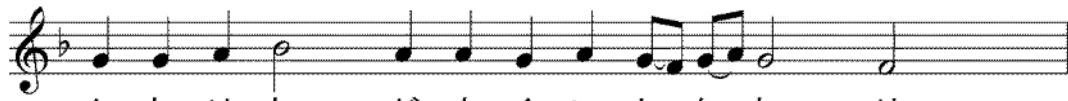
誦經) ^{しゅ きび われ ぼつ われ し わた}主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
 主 我 力 我 歌 彼 我



が す く い と な れ り 。
救

誦經) 主は、我が力、我が歌なり、



か れ は わ が す く い と な れ り 。
彼 我 救

【 アポストロス 使徒經 141 端 コリント前書 9 章 2～12 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがコリント人に達する前書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、爾等は主に於て我の使徒職の印なり。我を議する者に我が答うる所是

なり。我等豈食い飲むに權なきか。我等豈姉妹なる妻を攜うる事、他の使徒及び主の

兄弟、及びキファの如く然る權なきか。抑獨我とヴァルナヴァとは工作せざる權な

きか。誰か軍士と爲りて、己の給養を以て勤むるをせん。誰か葡萄を樹えて、其果を食

わざらん。誰か群を牧して、羣の乳を食わざらん。我唯人の情に循いて之を言うか。

律法も亦斯く言うに非ずや。蓋モイセイの律法に録して云く、穀物を踏み落す牛には

口を閉づる勿れと。神は牛の爲に慮るか。抑之を言うは、特に我等の爲にするか。

是れ我等の爲に録されたり、蓋耕す者は、望ありて耕すべし、穀物を踏み落す者

は、其希望する所を獲る望ありて之を爲すべし。若し我爾等の中に神に屬する物を播

きたらば爾等の身に屬する物を獲るは、豈大事ならんや。若し他人此の權を爾等の中に

獲ば、況や我等をや。然れども我等は此の權を用いざりき、乃凡の事を忍ぶ、ハリ

ストスの福音に聊も阻礙を置かざらん爲なり。

(比較用 口語訳) あなたがたが主にあることは、わたしの使徒職の印なのである。わたしの批判者たちに対する弁明は、これである。わたしたちには、飲み食いをする権利がないのか。わたしたちには、ほかの使徒たちや主の兄弟たちやケパのように、信者である妻を連れて歩く権利がないのか。それとも、

わたしとバルナバとだけには、労働をせずにいる権利がないのか。いったい、自分で費用を出して軍隊に加わる者があろうか。ぶどう畑を作っていて、その実を食べない者があろうか。また、羊を飼っていて、その乳を飲まない者があろうか。わたしは、人間の考えでこう言うのではない。律法もまた、そのように言っているではないか。すなわち、モーセの律法に、「穀物をこなしている牛に、くつこをかけてはならない」と書いてある。神は、牛のことを心にかけておられるのだろうか。それとも、もっぱら、わたしたちのために言うておられるのか。もちろん、それはわたしたちのためにしるされたのである。すなわち、耕す者は望みをもって耕し、穀物をこなす者は、その分け前をもらう望みをもってこなすのである。もしわたしたちが、あなたがたのために霊のものをまいたのなら、肉のものをあなたがたから刈りとるのは、行き過ぎだろうか。もしほかの人々が、あなたがたに対するこの権利にあずかっているとすれば、わたしたちはなおさらのことではないか。しかしわたしたちは、この権利を利用せず、かえってキリストの福音の妨げにならないようにと、すべてのことを忍んでいる。

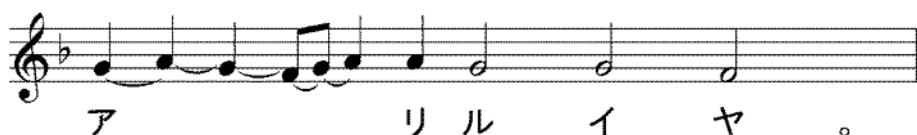
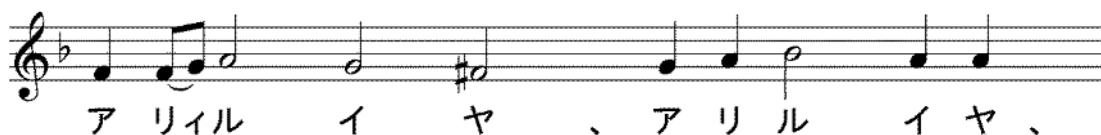
【 アリルイヤ 主日第2調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

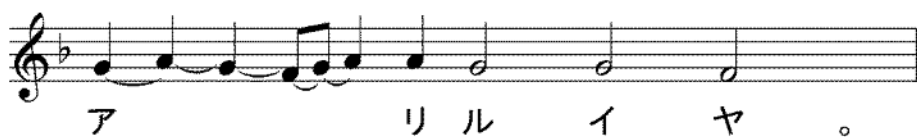
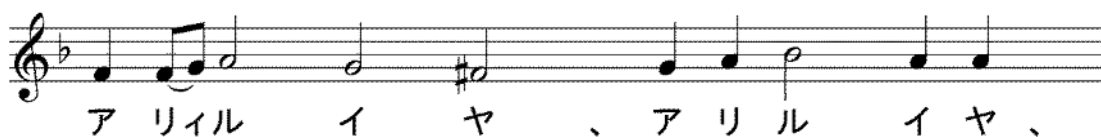
誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{ねが しゅ うれい ひ おい なんぢ き} 願わくは主は憂の日に於て爾に聴き、^{かみ な なんぢ ふせ まも} イアコフの神の名は爾を扨ぎ衛らん、



誦經) ^{しゅ おう すく またわれら なんぢ よ とき われら き たま} 主よ、王を救え、又我等が爾に呼ばん時、我等に聴き給え、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん}人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念
^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ}の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を
^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ}畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所
^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ}を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん}爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ}て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書77端 18章23～35節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん}睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ}マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き しゅ さ たとえ もう い てんごく そのしよぼく かいけい ほつ}謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、天國は、其諸僕と會計せんと欲せ

^{くんおう に かいけい はじ とき いつせんまんきん おいめ もの かれ ひ きた その}し君王に似たり。會計を始めし時、一千万金の債ある者を彼に曳き來れるあり。其

^{つぐの あた よ しゅ かれ み そのさいし そのことごと しょう ひさ}償うこと能わざるに因りて、主は彼の身と、其妻子と、其悉くの所有とを鬻ぎて、

^{つぐの めい そのぼくふふく かれ はい い しゅ われ ゆる われことごと}償わんことを命ぜり。其僕俯伏して、彼を拜して曰えり、主よ、我を寛うせよ、我盡

なんぢ つぐの そのぼく しゅ あわれ かれ はな かれ おいめ ゆる そのぼくい
 く爾に償わん。其僕の主は憐みて、彼を釋ち、彼に債を免せり。其僕出でて、
ひとり とも おのれ ぎんいっびやく おいめ もの あ これ とら のど し い なんぢ
 一人の同僚の、己に銀一百の債ある者に遇いて、之を執え、喉を扼めて曰えり、爾
お ところ われ つぐの そのともかれ そくか ふふく もと い われ ゆる われ
 が負う所を我に償え。其同僚彼の足下に俯伏して、求めて曰えり、我を寛うせよ、我
ことごと なんぢ つぐの しか かれうけが すなわちゆ そのおいめ つぐの いた
 尽く爾に償わん。然れども、彼肯わず、乃往きて、其債を償うに至るま
これ ひとや くだ た ともこれ み はなはだうれ きた あ ところ ことごと しゅ
 で、之を獄に下せり。佗の同僚之を見て、甚憂い、來りて有りし所を悉く主に
つ そのときしゅ かれ め いわ あ ぼく なんぢわれ もと よ われそのおいめ
 告げたり。其時主は彼を召して曰く、悪しき僕よ、爾我に求めしに因りて、我其債
ことごと なんぢ ゆる わ なんぢ あわれ ごと なんぢ またなんぢ とも あわれ あら
 を悉く爾に免せり、我が爾を憐みし如く、爾も亦爾の同僚を憐むべきに非
しゅすなわちいか そのことごと おいめ つぐの いた かれ ごくり わた も なんぢ
 ずや。主乃怒りて、其悉くの債を償うに至るまで、彼を獄吏に付せり。若し爾
らおのおのそのこころ おのれ けいてい そのつみ ゆる わ てん ちち またか ごと なんぢら
 等各其心より己の兄弟に其罪を免さずば、我が天の父も亦斯くの如く爾等に
おこな
 行わん。

(比較用 口語訳) 天国は王が僕たちと決算をするようなものだ。決算が始まると、一万タラントの負債のある者が、王のところに連れられてきた。しかし、返せなかったので、主人は、その人自身とその妻子と持ち物全部とを売って返すように命じた。そこで、この僕はひれ伏して哀願した、『どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから』。僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。その僕が出て行くと、百デナリを貸しているひとりの仲間に出会い、彼をつかまえ、首をしめて『借金を返せ』と言った。そこでこの仲間はひれ伏し、『どうか待ってくれ。返すから』と言って頼んだ。しかし承知せず、その人をひっぱって行って、借金を返すまで獄に入れた。その人の仲間たちは、この様子を見て、非常に心をいため、行ってそのことをのこらず主人に話した。そこでこの主人は彼を呼びつけて言った、『悪い僕、わたしに願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は立腹して、負債全部を返してしまうまで、彼を獄吏に引きわたした。あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸